

移民第二世代女性の進路決定をめぐる家庭内での相互作用
—家父長制と経済秩序の交差に注目して—

河村優花(日本女子大学大学院 人間社会研究科)

移民第二世代研究における分析の観点として、「ジェンダー」は重要な位置を占めており、それは主に「家族」との関連で論じられる。日本社会の移民第二世代を対象にした清水ほか(2021)は、ベトナム系、中国系、フィリピン系といった、それぞれのエスニック・グループ間の母娘関係において生起する、ジェンダー規範の文化変容を、分節的同化理論(Portes and Rumbaut 2001=2014)を援用することで明らかにすることを試みている。その一方で、「家庭」を社会構造の中に位置づけたうえで、その内部でどのような相互作用が行われ、それによって移民第二世代のライフコースがどのように規定されるのかといった観点からの分析が十分に行われてきたとは言いがたい。

本研究では、社会からジェンダー問題が放逐される場であると同時に、ジェンダー問題を生産する場として「家庭」を位置づけたうえで、その内部でどのような相互作用が行われ、その中を移民第二世代の女性たちはいかに生き抜いているのかということ、「進路決定」に注目して検討する。検討にあたっては、既に成人している移民第二世代女性2名を対象としてインタビュー調査を実施した。1人目の調査対象者であるA氏(日比国際結婚家庭出身・国籍は日本)に対しては、質問項目を用意しない形での調査を1回、第1回目のインタビューを補足することを目的とした調査を1回といった、計2回にわたる調査を行った。いずれもオンラインで調査を実施している。2人目の調査対象者であるB氏(日韓国際結婚家庭出身・国籍は日本)には、対面での聞き取り調査を2回実施している。1回目の聞き取り調査はA氏と同様に、事前に構造化された質問項目は用意せず、時系列に沿った形での聞き取りを行っている。2回目の聞き取りは、質問項目を設定し、半構造化インタビューを実施した。

以上のインタビュー調査を、「移動の物語」、「家庭の物語」、「社会移動の物語」という3つの観点から分析した。1点目の観点については、移民のホスト国への適応を分岐させる要素としてポルテスとルンバウト(Portes and Rumbaut 2001=2014)が「人的資本」、「編入様式」、「家族構造」を挙げており、これらが移動の文脈によって決定づけられるものであることから設定している。2点目の観点は、先述の通り、移民第二世代の「ジェンダー」が「家族」との関連で語られていること、また家庭内での相互作用について検討するという本研究の目的に則り設けている。3点目の観点は、「移動の物語」と「家庭の物語」を経て、移民第二世代女性のライフコースがどのように展開されていくのかを読み取るために設定している。

以上3つの観点から、2名の語りを分析した結果、移民第二世代女性の進路決定を規定するのは、第一に「家父長制の形態」であり、第二に「経済秩序への参入様式」であることが明らかになった。第一の観点に関しては、2名のインタビューからは、家父長制的な従属関係が生起するのは、日本と第一世代の母国という、2つの文脈の間、もしくはいずれかの文脈であることが指摘でき、どちらの文脈の「家父長制」に強く規定されるかはいくつかのパターンがあることが指摘できる。2つ目の観点である「経済秩序への参入様式」に関しても同様に、第一世代の母国と日本、2つの経済秩序から、移民第二世代女性たちは規定を受けていると考えられる。一方、どちらの秩序に編入されるかによって彼女たちが示す進路決定の結果も異なることが推察できる。

参考文献

清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平, 2021, 『日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店。

Portes, Alejandro and Rubén G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press. (村井忠政・房光光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾訳・山田博史訳, 2014, 『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店。)

(キーワード: 移民第二世代、家父長制、進路決定、ジェンダー、経済秩序)